

新人保育者の語りに見る外国につながるのいる子どもの保育

Narrative of newly-employed early childhood care and education teachers on their lives in the classrooms with children connected to other cultures

内田千春
Chiharu UCHIDA

概要

本研究は、外国につながるのいる子どもがいる教室で営まれる乳幼児保育の現況と課題を探ることを目的としている。愛知・三重県内の保育所で勤務する4人の若手保育者の新人としての経験に関する語りを研究対象にデータ収集を行った。面接調査の結果、地域のリソースや現場研修の機会に差があること、子どもへの対応より保護者対応に強い危機意識をもっていることなどが示された。一方外国籍の子どもへの対応として保育者らが課題としていた事項は、一般的な保育としての課題でもあり、現場の新人保育者を支える仕組みづくりが重要であることも示唆された。養成段階での異文化理解教育・多文化教育についても更なる研究が必要である。

キーワード：保育、新人保育者、専門性の発達、外国につながるのいる子ども

Abstract

This study explores the current trends and challenges for ECEC teachers through narrative stories told by four young teachers working in Aich and Mie prefectures where many of their students' families are non-Japanese or mixed race. These teachers were asked to tell their stories about how they met; responded to; felt by being challenged; or interacted with their students and their non-Japanese/mixed race families. Their narrative stories illustrate that the teachers had more difficulty interacting with the parents rather than the children. In addition, they also had problems which they attributed to the children of non-Japanese/mixed-race families, which were actually related to being novice teachers. One teacher's narrative shows that with systematic on-going support she had several opportunities to discuss issues related to her students with other professionals knowledgeable in understanding other cultures. From the analysis of the narratives, the author finally suggests desired changes in teacher education programs and professional development training for new teachers.

Keywords: Early Childhood Care and Education (ECEC), New ECEC teachers, Professional development, Children of non-Japanese or mixed-race families

目次

1. 問題意識
2. 東海地方4県の現状
3. 方法
4. 結果と考察
 - 4.1 担任保育者として外国につながるのある子どもと出会う
 - 4.2 初期の課題
 - 4.3 「同じ子どもだから」から「違いへの対応」へ
 - 4.4 保育士の変化と成長を支えるもの（N保育士のエピソード）
 - 4.5 外国籍の子どもがいることの保育への影響（A保育士のエピソード）
5. まとめと今後の研究の方向性

1. 問題意識

外国籍児童とは、日本国籍を持たないが日本で生活している子どもたちを指す言葉である。マジョリティの日本文化と異なる文化的背景を持つ家庭で育つ子どもたちを意味し、日系ブラジル人家庭や国際結婚家庭など複数の文化的背景を家庭内に持ちながら日本国籍を持つ場合も少なくない。さらに、海外で長期間生活した日本国籍の児童（いわゆる帰国子女）や、在日外国人の中には二世代以上に渡って日本に在住する人々も多く、さらに日本国籍を取得しながら母国の文化を維持している家族もめずらしくない。このように多文化化が進む日本社会の状況を考えるとき、外国籍という用語では実情にそぐわないため、より幅広い児童を含む「外国につながるのある子ども」という用語も使用されるようになってきた。

本論文でも、様々な言葉や文化背景を持ち、日本文化と家庭文化との差異が大きく、他の子どもたちに比べて保育所・幼稚園への適応において多くの課題に直面しなければならない子どもたちを「外国につながるのある子ども」と捉えている。ただし、調査対象地域で通常使用されている「外国籍の子ども」も使用する。その場合は、本人あるいは家族が日本以外の国の国籍を持っている場合と考える。

外国籍児童の学校適応問題が顕在化した1990年代後半には学齢期、特に義務教育年齢期の子どもたちの問題が取り上げられてきたが、日本に定住あるいは長期滞在（いつか帰るかもしれないという意識があるという意味において）する家庭が増える中で、こうした

人口動態の変化はより小さな子どもたちの集団で顕在化するようになった。乳幼児にとって、入園する保育所・幼稚園は初めて出会う公的集団である。その子どもが第一子あるいは来日間もない外国につながるのいる家庭にとっては、初めての「日本の学校」であり、公教育への入り口である。来日間もない家庭や人間関係が同文化コミュニティに限られている家庭の場合、日本社会の制度・ルール・慣習は子どもを通してぶつかる最初の間となる。生活基盤が不安定な場合などは、保育所・幼稚園が行政・福祉サービスへの窓口としての役割を担う場合もある。

外国につながるのいる子どもの場合、家族の来日または帰日時期によっては小・中・高等学校が同様の「入口機関」として初期適応を支える役割を担っている。この初期適応期への援助はクリティカルであり、小学校以上の教育では初期指導教室・適応教室等様々な対策が行われてきている。しかしながら、保育現場での具体的な援助については現場・地域の努力に委ねてきた部分が多く、地域間の情報交換が十分でないため、積み上げてきたノウハウが広がりにくい現状がある。また、言語発達や異文化適応に関する研究がなされてきてはいるものの、その知見（大場・民秋・中田・久富 1998；山田 2006 等）が現場や行政に必ずしも伝わっていないという問題点がある。

こうした現状の中で、外国につながるのいる子どもとの日々の保育を、新人保育者たちはどのように経験しているのだろうか。本研究では、東海地方で働く新人保育者が、外国につながるのいる子どもに関わる保育現場の課題と現状をどのようにとらえているのかに関して面接調査を行った結果の一部を報告する。この研究は仮説生成的研究として、文化的にも多様化する保育現場で働く保育者に必要な実践的知識・保育技術・態度に関する今後の研究方向性を考察している。

2. 東海地方 4 県の現状

静岡、愛知、岐阜、三重の東海 4 県は製造業が盛んであり、1992 年の入国管理改訂後ニュー・カマーと呼ばれる日系ブラジル人をはじめとする外国人労働者が多数流入した地域である。名古屋市近郊都市圏にある愛知県豊田市、豊橋市、豊川市、知立市、安城市、刈谷市、東海市や岐阜県可児市、大垣市、各務原市、三重県松阪市、鈴鹿市、四日市市等をはじめとする特定の集住地域に加えて、その他の市町村でも南米諸国など同じ言語文化を背景とする外国人が集まっている。リーマンショック以後は、フィリピン、中国、バングラデシュ等出身国が多様化してきている。また、名古屋市等の大都市圏では工場労働以外の理由で移住してきた外国人も多く、オールドカマーである在日朝鮮人を始め留学生や事業者を含む様々な国籍や言語文化背景を持つ人々が在住している。

3. 方法

新人保育者の保育士としてのライフストーリーを引き出し、それぞれの地域の文脈、保育園の歴史、子どもの育ちの状況を含めて分析するために、以下の方法で調査した。

研究協力者：筆者が所属していた保育者養成校の卒業生およびその同僚で保育経験が3年未満の保育者15名に協力を依頼した。そのうち、勤務園に外国につながるのある児童が在園し、2011年秋～冬に面接調査が可能だった4名を対象に調査を実施した。

表1 研究協力者4名の勤務地・経験・外国籍児童との関わり

	A保育士 (男性)	M保育士 (女性)	N保育士 (女性)	K保育士 (女性)
勤務地	三重県B市	三重県B市	三重県C市	愛知県A市
経験年数	2年目	1年目	3年目	3年目
外国籍児童担当経験	2年目 3才児クラスで担当。	延長保育ではかわりがあるが、クラスの担任としてはない。	1～2年目で2才、4才児を担当。現在は担当していない。	2～3年目で3、4才児クラスの担任として担当。
担任するクラスの人員配置	クラス担任以外に、園の加配保育補助(通訳)1名	乳児担当のため4名の複数担任。	外国人加配保育士が園に1名、通訳が1名。2才は複数担任。	加配なし。

調査方法：2011年11月～1月 1回40分～1時間の半構造的面接法による面接調査を行った。協力者の居住地近辺にあるカフェやレストラン等、協力者の希望に応じた場所を利用した。面接は筆者と研究助手(学部学生。記録・質問を分担)の2名で行った。また、協力者の了承を得てICレコーダーに面接内容を録音した。

面接者と協力者の関係：面接の質問は主に研究助手が行い、半構造的面接法に基づいて、またこれから保育者になる後輩としての質問を交えながら面接調査を行った。また筆者は元担当教員・元保育者の立場で保育上の相談を受けながら、補足質問を行った。

分析方法：ワードにより書き起こしたデータは、デジタルファイルとしてQSR社N'Vivo8に取り込み管理した。N'Vivo8を使用して質問項目ごとの各保育者の語りの内容についてコーディングを行った。次に、コードごとに分類された語りの内容を再分析し、意味が似たコーディングを統合し、曖昧なコードについては細分化や再分類する作業を行った。

確定したコードごとに、4人の保育士の語りを比較し、外国につながるのある子どもと出会い、異文化接触体験、初期の課題、現在の課題、子どもの見方、先輩保育者やコーディネーター、言葉、保護者対応等のコードを中心に分析を行ったものを、次の結果と考察で報告する。

4. 結果と考察

4.1 担任保育者として外国につながるのある子どもと出会う

初めて担任を持つにあたって4人が共通して考えていたことは、平等に接することだった。外国につながるのある子どもにも、他の子と「同じにしていこう」「同じ様に接していこう」と“日本人の子どもと同じ”にすることが公平な立場と考えて保育を始めたという。

A 保育士だけは東海地方外の外国籍児童があまりいない地域で育っている。調査の前年に臨時採用保育士としてこの地域にやってきたA 保育士は、初めて外国につながるのある子どもたちの存在について考えるようになったと述べていた。そのためか、他の3人の保育者には見られない“外国人に対する構え”についての語りがあった。

自分が担任するクラスに外国籍の子どもたちがいると知ったとき、どう接したらいいのだろうか、どんな顔をしていて、自分はどのように対応するのだろうか、不安というよりも好奇心が先にあった。(A 保育士)

A さんの構えは、決して否定的なものではなかったようである。対照的に、他の3人の保育者は自然体で子どもたちに向き合い始めた様子が伺えた。

必ずクラスに一人か二人いるものなので、特に身構えることはなかったです。実際他にもっと手のかかる子どももいたわけだし (K 保育士)

3人は調査対象地域で育ち、小中学校での学校生活では同じクラスや学年にいた外国籍児童と共に育ってきている。また、保育実習で配置された園でも外国につながるのある子どもがいた。ただし、個人的に親しい関係を築いたことはなく、以下のように異文化への理解は限定的である。

小学校の時同じクラスにもいたけれど、仲のいい友達というわけでもなかった。今から考えると、(その子たちは) ポルトガル語とかでしゃべってたのかなと思うし、教えてもらっておけばと思うけれど。(M 保育士)

A 市にいと、外国籍の人がいるのは自然なことだったから。あたりまえのことだと思っていた。まあ、いるなっていうくらいで。(N 保育士)

彼女らが育った頃に異文化理解教育や人権教育が今ほど行われていたかどうかは不明であるが、少なくとも外国籍の家族に対して身構えることなく接することができていたようである。それでも、外国籍の同級生や隣人と個人的につながった経験はなく、出身国による具体的な状況・習慣や外国から来て日本で暮らす人々がどういう時に困難さを感じるか等についてはあまり知識がないまま働き始めていた。

4.2 初期の課題

課題や困難があるのはどのような場面かという質問に対しては、4人の保育者共通の回答が多かった。保育者からの指示の理解・食事場面での対応・保護者連絡・行事など日本的なものへの順応等があげられていた。ただ、担当した子どもの年齢によって順応度が異なることがわかった。

M保育士とN保育士は、日本人の子もみんなが言葉を学んでいる段階だから言葉の問題がないので、乳児さんクラスの場合特に子どもについてはあまり気にならなかったという。そして、子どもよりも保護者対応に関わるエピソードを保育上の困難さとして述べていた。

まだ、秋口でそんなに寒くはない時に、延長保育の時間になってお迎えを待ちながら廊下で遊んでいたら、それを見た保護者から「寒いから絶対外に出さないで中に入れておいてほしい」とか「下の1才の子は、(延長保育の部屋に移動するために)降りていく階段でも靴下や上着を着せて欲しい」とか言われるんですよね。見ていると子どもは平気だし、むしろ着たり脱いだりを嫌がるくらいなんですけど (M保育士)

お手紙とか、訳してもらったものとかでもどこまで見てもらえているのかわからない。(N保育士)

水筒を持ってきてと言ったら中にお茶をいれてくるとかもちゃんと説明しないと。ジュースとかいれてきちゃったりするし。向こうはそれが普通らしいけど、やっぱり甘いのは…せめてお水でってお願いしたり (K保育士)。

これらのエピソードに表れている事項は、日本人にとって当たり前のこととして暗黙のうちに了解されていることが外国につながるのある家庭にとっては変わったことと捉えられる事項の例である。学校からの手紙は読まなければいけないものなのか、大事なことは口頭で伝えられるものなのか、廊下があまり暖房されていないことへの違和感、寒さの基準、薄着保育や飲料に象徴される健康と育児についての考え方の違い等、次々と出会う保

護者の考え方と自分の常識とのズレに戸惑う様子が伺える。

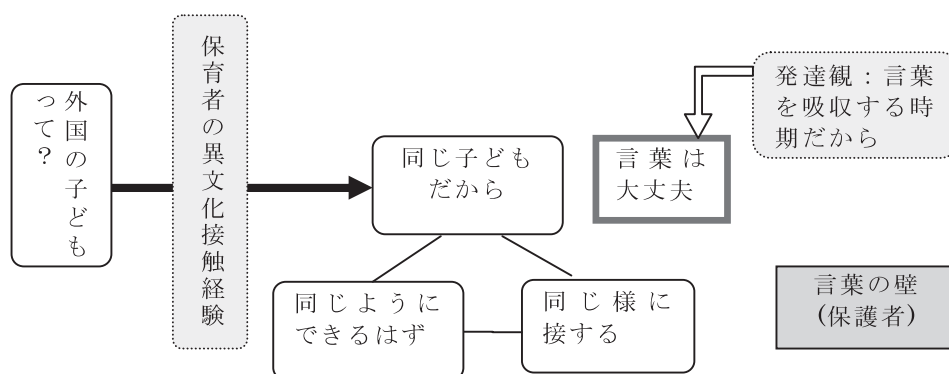


図1. 保育者の初期の気づき

上記の保育士らの語りをまとめたのが、図1である。異文化接触経験が少なかったA保育士に特徴的だったのは、構えていた自分の姿が変化し、「そこまで特別にしなくて(も)同じようにご飯を食べて同じように寝て…」と、同じ人間、子どもだということに気がつき自分の構えを修正した所だろう。違うはずという既成概念で出発したために、類似点の方が多く見えてきたと考えられる。

ただしここで注意しなければならないのは、乳児クラスの子どもに「言葉の問題がない」のはこれら新人保育士の理解に基づく判断だということである。もちろん、先輩保育者の見方を新人なりに取り組んだ上で得たものではあるが、専門家として未成熟な段階であることは考慮すべきだろう。乳幼児期は言葉が発達する時期であり、比較対照する他の子どもたちの表出言語もそれほど多くはない。保育士らの発達観はマジョリティの日本文化内での発達についての考え方であり、多言語・多文化環境にいる子どもにそのまま適用できない部分があった可能性もある。更にここでいう「問題のなさ」は保育者にとっての問題のなさにすぎず、潜在的な課題が潜んでいる可能性もある。言語発達の遅れが本当でないのか、該当児童の今後の発達を注意深く見守っていく必要があるだろう (Ballystok & Hakuta, 1994; Tabors, 2008)。

4.3 「同じ子どもだから」から「違いへの対応」へ

異文化経験が少なかったA保育士は、担当する年少クラスの子どもたちと関わりを重ねて行くにつれ、次第に外国籍の子どもがいる教室特有の課題があることに気がつくようになってきたという。

外国籍の子は自分の感情を表現する言葉を知らないので、嫌なことがあると「やめて、やめて」としか言えない。日本の子もなぜ嫌なのかがわからないので嫌な気持ち

になってしまう。(A 保育士)

仲立ちをしてやりたくても、「その場面を見ていれば推測もできるが、わからないときは自分もその子どもの言葉が分からない」ので他の子どもと同じように対応してやれないいらだちが語られた。また、子どもへの対応について話をしている時、

いざこざが起こったら、日本の子にはあまり使わないが「だめ」とまず言う。否定する言葉なのであまり使いたくないが、理由を話してもなかなか理解されないので、わかりやすくジェスチャーをつけながら「だめ」と言う。気持ちがどこまで晴れるかわからないが、その後でスキンシップを十分に取るなどしてフォローもする。(A 保育士)

と、外国籍の子どもとその他の子どもとで対応を変えていると話していた。一般的な保育士の配慮事項としてなるべく「だめ」や「否定語」は使わないと言われているが、外国籍の子どもに対してはその“常識”が適用できない状況が発生している。一方、制限されてばかりでストレスがたまりがちな子どもの状況にも A 保育士は気が付いており、認められる機会、受け入れられる機会を増やそうと努力している様子が窺える。

同じ市で働く M 保育士は乳児担当であり、また早朝・延長保育がある主要駅に近い園に勤務している。子どもの受け渡しをする機会が多く、シフトを組んで勤務する保育者間での情報共有の難しさを感じているという。下記に、子どもへの投薬について保護者とのやりとりに失敗した時についての語りをそのまま示す。

薬の受け取りもなかなかうまくいかないことがあります。処方箋を園に提出する決まりになっているのだけど、忘れてきて出してもらえない。処方箋がないとどういう薬なのか、いつ飲むのか、副作用はあるのか、園で飲ませても大丈夫なのかがわからない…新人だからというのもあるけれど、日本人ならそこまで失敗しないことでも、外国籍の保護者が相手だと言葉が片言なので、何を言っているのかよくわからなくて難しいです。日本人なら言葉が通じるのでコミュニケーションがとれる。(M 保育士)

保育所運営の規則に基づいて丁寧な対応をしたいのだが、その規則の取り扱いについて保護者に伝わらないもどかしさが感じられる。上記のような保護者の行動は、日本語が理解できないから伝わらないからおきているのか、あるいは規則の内容や取り扱いにも文化差があるから保護者が理解しにくいために引き起こされているのか判断ができない。他にも忘れ物や送迎時間、行事の前後のやりとりのエピソードなど、個々の出来事としては小

さなことで日々積み重なっていくために、保育の難しさや保育者の困り感につながっているようである。

語りの内容が違ったのは、A市で保育士3年目になるK保育士である。まず困る場面が少なく特別なエピソードとしてインタビューの中に表れて来なかった。K保育士によれば、彼女が担当する外国籍の子どもたちは、保育所に長く通っていて保護者が保育所に慣れていること、保護者が地域に溶け込んでいて保護者同士のつながりもできていること、子どもたちも日本語がある程度わかっていること等から、宗教的に参加できない日本の行事等を配慮する程度でよいからだという。宗教食の対応を始めとした保護者の適応を支えてきたこれまでの実践の積み重ねがあり、該当する文化に対して何を配慮すればよいか園内で共通理解があることが効果的に機能しているとK保育者は捉えている。

C市で3年目になるN保育士は、言葉の問題について次のように語っている。

子どもが小さいから日本語で言ってもどこまでわかっているのか、小さいとわからないなりに返事をされるから、本当のところはなかなかわからなくて…保護者も同じ。絵でかいたりジェスチャーしたり、伝えているつもりでも伝わっていないのじゃないかと思う。そういう時は、(外国籍)コーディネーターに入ってもらいます。だいたいポルトガル語かスペイン語なので、通訳に入ってもらえる人はいる。それ以外だとまた考えないといけないけれど。(N保育士)

公立保育所は市町村単位での運営である。経験年数だけではなく地域対応の違いによりその課題への向き合い方が異なっているのがわかる。B市では若干名のポルトガル語通訳が市全体に対応している。A保育士の園は外国籍児童が多いため、園に一名通訳兼雑務の職員が配置されている。同じ市内でもM保育士は、園内には通訳がないので、限られた知識・資源を活用しながら試行錯誤しなければならない状況にある。また、今回の協力者が勤務する三市では全て、外国籍児童がいる場合加配保育士を配置できる制度があり活用されていた。保育士らの語りによれば、A市・B市で臨時採用や新規採用の保育士らが加配保育士として配置されていたのに対し、N保育士の勤務園では経験年数の多い保育士が外国籍児童に対応するための加配として配置され、日常的に保育技術・知識を学ぶことができる環境が保障されていた。この加配保育士は、新人保育者の指導もでき母語通訳とのコーディネートを行う等の裁量権もある点が興味深い。N保育士はこの加配保育士から母語資源の活用、保護者との関係構築のコツなどを学んでいくことができたという。また、通訳は保育現場を理解した通訳コーディネーターと呼ばれる存在だという。こうした体制の中で、通訳コーディネーターや加配保育士に頻繁に教室に入ってもらえることが可能となる。もう一つの視点が教室に入ってくることにより、援助の手厚さというだけ

でなく、保育者の気づきも多くなるという利点がある。

N 保育士は、外国籍の子どもに対して気をつけていたこととして、次のことをあげた。

自分はほとんどしゃべれないけれど、できる範囲で日本語とポルトガル語で言うようにしていました。気になっていた子はよく走る子だったから、後ろから声をかけることが多くなるから、日本語でパーッといわれるよりは聞きなれた言葉のほうがこちらに向いてくれるから… (N 保育士)

先輩保育者から母語使用が望ましい状況もあることを学び、しゃべれないことにこだわらず単語で母語を使用している。N 保育士がこの話の後語った、自分の子どもの見方を変化させた外国人コーディネーターとのエピソードについて次に示し考察する。

4.4 保育士の変化と成長を支えるもの (N 保育士のエピソード)

「わからないから」から「やりたくないんだよね」へ

年中クラスの4才児の子どもたちで増やし鬼をやることになりました。日本語でルールを言ってもわからないだろうから、ホワイトボードを使って磁石を使って(子どもたちに見たてて)視覚でわかるようにしました。ドッジボールの時も同じように、視覚からわかるように。目で見たらわかる。やっていくと他の子どもたちが身振り手振りで教えてくれる。増やし鬼ではなんとかやったのですが、そうやってしても、ドッジボールをなかなかしなかった。ただ走ってしまう。(ブラジル人の子)3人で怖いものなしで動くのでドッジボールはむちゃくちゃになってしまいました。いろいろやってみるんだけど、なんで(ブラジル人の子たちがルールを)わからないのかわからない。

チャンスがあった時、コーディネーターさんに入ってもらって、どうしてうまく伝わらないのか様子を見てもらうことにしました。すると、「ルールはわかっている。ボールあたらこわいからしない。」「うまくできないといや」とか、ルールが分かっているかどうか以外に違う理由もあつたりしたことがわかって…対応がずれてて…3人とも違う理由で…このことから、「外国籍の子」と見ずに、「1人1人性格があるから、それぞれ個人に応じて接しなければいけない」と感じました。そして3人に同じような対応をするよりも、一人ひとりにあつた対応を見つけるように努力するようになり、3人がそれぞれ自由に過ごせるようにしていました。その3人は連れ立って遊ぶことが多かったけど、日本の子と遊ぶこともありました。たまたま気が合つて一緒に遊んでいるのか、同じ外国籍ということで共感する部分が多いので一緒にいるのかはわかりません。(N 保育士) * ()内は筆者の加筆

子どもがやらない原因をN 保育士がどのように考えたかを中心テーマに、上記のエピソードをとらえ直すことにする(図2)。N 保育士は、3人の子どもたちがドッジボールをやらないのは、『言葉の問題』でルールがわからないからだと考え、言葉を使わない説明の方法を工夫した。それでも子どもたちがドッジボールをやらなかったとき、ルールが理

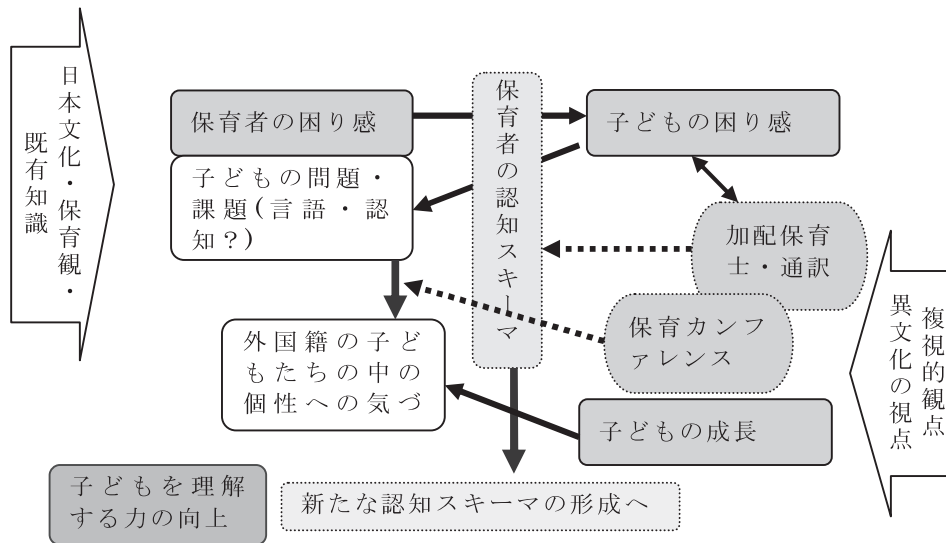


図2 N 保育士の変化と子ども理解の深化

解できない『認知力に関わること』が原因なのではないかと考え、行動観察を通して子どもたちの理解に努めようとした。そのころ、母語話者のコーディネーターにN 保育士の教室に来てもらうことができた。コーディネーターが3 人の様子を観察すると、実はボールが怖いという個性の問題だったり、単に自分がうまくできる自信がないものはやりたくないという社会性の発達に関わるのが原因だったりしたことがわかった。

言語に頼らない行動観察にも、N 保育士は日本文化、保育文化に影響された認知スキーマ(子どもを見る視点)を使用している。N 保育士の認知スキーマは、3 人の外国籍の子どもと同じ文化を共有するコーディネーターの視点と出会うことで揺さぶりを受けた。その過程で、子ども一人ひとりではなく、『外国人の3 人』というステレオタイプで見ている自分に気がつき、修正を図ろうと意識する。これにより、新たな認知スキーマを形成し子どもを理解する視点を増やしていくことができた。

保育カンファレンス(事例検討会議)や日常的な他の保育者との会話から、また通訳や加配保育士、保護者等から異文化側からの見方を示される機会から、保育者は自分とは異なる視点が存在することに気づき複視的(Pluralistic)に子どもを捉えられるようになっていく。このような日常の保育現場を理解している異文化の視点を持つ他者の存在、子どもについて語り合う場があること、外国につながるのいる子どもへの対応について実践的な知識を持つ同僚がいることこそが、N 保育士の成長に寄与する地域資源(Local resource)となっている。

4.5 外国籍の子どもがいることの保育への影響(A 保育士のエピソード)

A 保育士の教室の外国籍の子どもたちは、日本語が通じないなりに個別に伝えると期待された行動をとれることが多かった。こうした状況で、3 才児に対してどの程度の生活

習慣をつけるべきか、言葉に限らない文化による違いがあるのではないかと A 保育士は考えている。送迎を見ていると、普段靴を保護者に履かせてもらっているのに日本の子どもに比べ上靴にはきかえるのが遅く、他の子どもたちが並んでいるのに、いつまでも1人で履いているということがあるという。日々の生活の中で経験を増やすよう配慮しているというが、A 保育士は他の子どもたちにも気になることがあるという。

日本の子が、外国籍の子を見て「出来なくてもいいのかな」と思い、甘えてしまっているように感じるのです。外国籍の子が休んでいて日本の子しかクラスにいないときは、頑張って他の子に追いつこうとしている子も、外国籍の子がいるときは、「あの子がいるから」というふうに甘えてしまうみたいで。もっと伸びることができるのに、外国籍の子を見て甘えることで、少ししか伸びることができないではないかと・・・(A 保育士)

保育者の外国籍の子どもへの対応は他の子どもたちも見ていた。そのことに気がついた A 保育士は、インタビューの時点でこれから対応を考えていこうとしていた。同時に、これら外国籍の子どもたちが、常にやってもらい、後からついていく立場にいると思われた。外国籍の子どもたちが達成感、自己肯定感を持てる環境を整える工夫も同時に必要となるだろう。

また、A 保育士が外国籍の子どもに合わせることを優先すると、次のような影響も出てくると気付いている。

外国の子たちは日本の歌を覚えるのが難しいようで、ついつい同じ歌ばかりを歌っていて、隣のクラスの先生と話をしたらうちのクラスは半分くらいしか歌ってなくて慌てています。やっぱり、小さい時に知っていてほしい歌とか、やっておかなければいけないものがあると思うので。(A 保育士)

こうした課題は、実は外国籍の子どもに限ったことではない。発達的に支援が必要な子どもや身体機能に障害がある子どもがクラスにいる場合を始め、子どもたちの個々の状況は様々である。集団の中でいかに個を伸ばし、個がいきいきと過ごせる環境を作ることによって集団としてまとまっていく(赤石 2007、2009)。A 保育士が外国籍の子どもの課題としていることは、一般的な保育の課題でもある。

どの教室にもある課題が、外国籍の子どもがいることで増幅して感じられる、また見過ごしてしまったかもしれない自分の保育の課題が外国籍の子どもがいることで顕在化する。保育者としての力量を高めることと、複視的視点に気づき異文化をとらえる感受性を

高めることの両方が、若い保育者に求められているのではないだろうか。

5. まとめと今後の研究の方向性

今回の調査に協力を得た4人の保育者が、それぞれの地域の全てを把握しているわけではない。また4人が典型的な新人保育者として地域を代表しているわけでもない。本研究の結果は、少なくともこのインタビュー調査を通して、外国につながるのいる子どもたちがいる教室で働いて行く若い保育者はどのような課題を抱えているかその一端を示唆するものである。彼らの語りから、保育者の実践を支えていくためにどのような研究が必要かを考える材料となる点がいくつか浮かび上がってきたと言える。

乳幼児の段階でも、家庭の文化がマジョリティの日本文化と異なる場合、新しく出会う文化への初期適応期として丁寧な対応が必要である。保育年数が長い子ども等日本語が堪能になっている子どもの中にも、保育の内容に参加できず自己肯定感を育てにくい状況にある子どもがいる。そもそも幼稚園や保育園という新しい集団の場に入るのは、どの子どもにとっても大きな変化を受け入れなければならない出来事である。小さい子どもは自然に馴染むと決めつけず、最低限必要な保育資源や有効な活用システムを検討して行く必要がある。その時、既にそれぞれの地域、園でローカルに所有するノウハウが存在することは間違いない。こうしたノウハウを集め広く還元することも必要だろう。東海4県にまたがる広域の市町村ごとの取り組みに対する調査・評価が必要である。

保育者養成課程に関する課題も浮き彫りになった。新人保育者たちは、主に個人的な経験をよりどころにして保育する傾向があり、必ずしも養成校での学びが活用されていない傾向があるようだ。筆者は、協力者のうち3名が卒業した養成校で勤務しており、該当の養成課程で外国籍児童への対応を含めた授業内容を行っていたつもりだった。しかし、それら養成課程の授業は実践現場で直面する課題との関連が明確でなく実践に応用できる形で吸収されにくいものだったかもしれない。養成校で働く教員として、有効な理論や実践の知識と共に卒業生を現場に送り出すために、真摯に授業者としての省察を重ねていく必要がある。

また保育者養成は、現場に新しい知見を広めていく手段の一つでもある。すなわち、収集検討されたノウハウや最新の知見を新人保育者を通して現場に送り込むことができる機会なのである。今後保育者養成課程に、1) 計画的な異文化接触と省察の機会を伴う偏見低減のためのカリキュラムを組み入れ初期の当惑・誤解を防ぐこと、2) 異文化に対する感受性を高めるカリキュラムを開発すること、3) 二つ以上の言語・文化の間で育つ子どもの発達とその具体的な援助についての知識を深める内容を組み合わせること、等が求められる。

文化的に多様な子どもたちが保育現場ではますます増えていく。外国につながるのある子どもの保育を見つめることで、保育全般の課題や保育者の専門性の発達課題も見えてくる。今後は、さらに卒業後1～3年程度の保育者への追跡調査を進めるとともに、中堅・主任・園長などへの調査を通して、積み重ねられてきた実践をとりまとめ、保育の質の向上そのものにつながる研究を行っていきたい。

参考文献

- 赤石元子 『個と集団の育ち』 無藤隆（監修）事例で学ぶ保育内容 領域人間関係, 127-154, 東京, 萌文書林, 2007, 2009
- Bialystok, E., & Hakuta, K. In other words: The science and psychology of second-language acquisition. New York:NY, Basic Books, 1994.
- 箕浦泰子 子供の異文化体験 人格形成過程の心理人類学的研究 増補改訂版 東京, 新思索社, 2003.
- 大場幸夫・民秋言・中田カヨ子・久富陽子 『外国人の子どもの保育～親たちの要望と保育者の対応の実態』 東京, 萌文書林, 1998
- Tabors, P. O., One Child, two languages: A guide for early childhood educators of children learning English as a second language, second edition, Baltimore, ML, Paul H. Brookes Publishing, 2008.
- 山田千明（編）多文化に生きる子どもたち 乳幼児期からの異文化間教育 東京, 明石書店, 2006.

備考

- *本研究は異文化間教育学会第33回大会での発表データを、再度分析し加筆修正したものです。
- *考察で論じた個々の保育現場での課題の考察は、協力者に対してインタビュー中または後に伝えられています。
- *協力下さったAさん、Kさん、Nさん、Mさん、また研究助手としてお手伝いいただいた今井さんのご協力を心から感謝し今後のご活躍を祈念しております。